千葉に建築を訪ねる

五　国立歴史民俗博物館の経緯

建築家　三沢　浩

大阪は千里の万国博記念公園の、北の一画に「国立民俗学博物館」が一九七七年に開館した時、何かおかしいと感じた。黒川紀章の初めての大型作品であり、梅棹忠夫館長でその下に一〇〇人程の研究者がいて、教授、助教授の資格で研究を始めたからである。「民博」は世界の民族の研究所であり、何故日本の民俗博物館ではないかという疑問があった。

その疑問に答えるべく「国立歴史民俗博物館」が、関東地方の佐倉市にある佐倉城跡に開館したのは、一九八三年のことであった。こちらの方は十数年の準備期間を経て一九八一年に設置され、芦原建築設計研究所の設計で、基本一九七三年、実施設計も一九七七年に済ませていた。関西に遅れること五年であったが、組織として教授、助教授は関西の半数の五〇人である。そして規模が違った。かっこ内は「民博」であるが、敷地こそ一三万㎡（四・一万）と大きいが、延床三・一万㎡（一・五（三・四万）、展示面積八六〇〇㎡（一・五万）はやや小さい。何もこんなことを比較しなくてもいいのだが、企業参加の京都大学派の「民博」の方が、何としても商売上手のようである。開館前から「友の会」を発会させて情報交流を半年早く始めたり、サポーターを募ったりもしていた。

だが芦原研究所の力を込めた作品であるだけに、全体の佇いに品があることを挙げよう。全体が低くのさばらず城跡の雰囲気を活かしながら、打込みタイルの落ち着いた白色で統一したことが、この品位を生んでいると見た。通常は上から見ることは出来ないのだが、平面図を見ながら、また俯瞰写真を見ても分かるように中庭を中心に、展示室群がピラミッド型にせり上がり、外に押し出してさながら卍印の一筆書きが、そのままジグザグの形となって、外観を示しているのに気付く。ややもすれば巨大さをそのままに示し、誇示して「利休ねずみ」などの色で、視覚的圧迫感を示そうとする建築家の姿勢に対して、こちらの方はヒューマンスケールに徹し、ただでさえ大きくなりがちな、持て余すような図体を極力細かく切ることで対応しようとしていることが読める。半地下にしなかった場合のことを考えると、城跡一三万㎡の一画である武家屋敷跡地が敷地になり、本丸を含む平山の城址公園としてこの小高い丘を残したことが、土地の風景をつくる上でも、ひとつの成果であったと思う。とかく市役所や公共建築を目立つ高い所に置こうとして、狭量で個人的な見栄を張りたがる建築家の多い中で、この点は重要であった。従って最後に残るのは収蔵庫の高さ三〇ｍの問題になる。

この資料を得るに当たって、当時の事務所にあって、設計に携わってきた新建の小林良雄会員の世話になり、ついでに話を聞いた。当時の所員は収蔵庫を低くすることを主張したが、芦原所長の最後の決断で「歴博」の位置を示すためもあったろう、地下に埋設するのではなく高く持ち上げることになったという。設計以前のこの敷地は城跡とはいえ、陸軍の佐倉連隊の兵舎が一棟残る原っぱだったそうで、周辺の樹木を残し、樹で建物を囲うべく取り計らったという。今では至極当然の考え方で、環境保護などと簡単にいわれているが、二〇年前の状況の中で建物を緑で隠すという考え方はまだ定着せず、建築家はむしろ逆らい、その建築を示そうとしていた時代でもあった。

内部の展示をそのまま歩くと、約二㎞に及ぶと『新建築』（1983・4月号）の発表で守屋秀夫担当者が書いている。中庭を中心とする巡廻で、疲れたら外の空気を吸いに出る。原始から現代までを六つに区分した膨大な展示があるのだが、確かに途中で息詰まるのを感ずる。一筆書きは正解なのだが、それを丹念に見て鑑賞し、古い物に目を通し理解して次に移るのは、美術品だけの展示とは違い、くたびれるのである。この内装展示には芦原研究所と剣持デザイン研究所、トータルメディア開発研究所担当とある。恐らく当初とは大分変わり、増築も考えられていたのだから、変化していることだろう。しかしこの中庭中心の卍型まわりの方針は変わらず、これは維持されるに違いない。コルビュジエも、F・L・ライトも一筆書きの将来増築の手法を渦巻型でとらえているが、これもその渦巻型の一変型といっていいであろうし、敷地からいっても形体からも、いつでも増築に耐えられる平面計画であると見てよい。

同じ雑誌で芦原義信所長が書いている。歩行動線をシークエンスの上で獲得するために、彼がソニービルで〇・九ｍの床レベル変化、モントリオール日本館で一・二ｍの変化を示したように、それぞれの展示シークエンスの切り換えに一・五ｍ差の床レベル変化をつけたといっている。これらは一筆書きの角や隅で、スロープによって構成されていることで分かる。かつての時代アメリカのポール・ルドルフは、床レベル変化によるシークエンスを実現し、イエール大学美術・建築棟が、三〇余の床レベルで構成されていることを誇ったりもした。時代は変わり、そのシークエンスに変わる斜めの壁や道が表現に使われ、ルドルフは失墜する。階段や段差の福祉対策が公共建築の一部になる時、建築家のシークエンスへの独断は、細やかな対応策に取って代わる。時代が変わり、気配りの手法も変わっているのである。

この所しばらく「歴博」へは行っていない。聞くところでは増築もあり、改造計画も進められているという。展示も変わるだろうし、改良点も多くなっているだろう。ここに書いてきたことの多くがすでに外部環境の緑の増加のように、変化しているかもしれない。自然の中で樹木の成長は、そのままだと本当に風景を変えるほど育っていく。そして内庭の苦労した緑の植え込みの方も、恐らくは大分変わりを見せているだろうと推量する。しかし建築は雨洩りは増えても、本体は変わらない。変わらずに元の姿を維持し、守っていけるかは当初の設計と監理への注意力と綿密な考察による。国立の建物は国の象徴でもあり、その点で可成り神経を使ったことであろうと見ただけで思う。その膨大な維持にも心を致す。内部の展示への心配りは当然としても、この複雑な姿を維持することは、そしてその外構を維持するのは大変だろう。だからといって単純な形で維持費を軽減したというわけにもいかず、建築の矛盾に困惑するのである。

（続）